

年寄り大切に する習慣



中村 哲

13

現地は最も数の当てにならぬ国である。人口はもちろん、自分の年齢も分からぬ人が多い。アフガニスタンの人口が二千四百万人というが、これも怪しい。戸籍がないし、「家族」といっても親戚一同が一つ屋根の下で暮らしている場合もあるし、都市では核家族もある。

農村部では一家族が「カライ」と呼ばれる家の中に住んでいる。家といっても、日干し煉瓦の高い塀に囲まれて四隅に物見の塔があり、全体がまるで要塞である。この「要塞」の中に入ると、塀の内側を背にして、長屋のように部屋が並んでいる。



加齢は脅える必要なく、結構居心地よい

「パシワールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。

年金制度ないアフガン

ねばならない。ところが困るのは、男性たちの言うことが各人各様、異なるのだ。明らかに五十人は居るはずだと思えるのに、三十人くらいだ、いや六十人だ、と一挙に倍に跳ね上がる。男女比を1対1にして、目に付く男を数えて倍にすればおよそ正しいが、案外これが難しい。

「どのくらい沢山なのか」とさらに問えば、「数千家族だ」という。さらに問い詰めて、「千か、二千か、三千か四千元」と聞くと、「お前さん、家がいっぱい、見えるじゃないか」と笑い始め、カップに茶を注いでくれた。万事正確さを重宝するわれわれ日本人には、耐え難い世界である。

さらにややこしいのは、「家族」というとき、自分の妻子の数を指すこともあれば、従兄妹はどこを含めた、家長の血縁すべてのこともある。そこで、苦肉の策、皆の大ききで見当をつける方が、案外正確なのである。現地語の「パシワール」語で人々が量や数を述べるとき、「少し」「沢山」「非常に沢山」という表現がやたらに多い。

ある村で、人口を尋ねたら、「いっぱい居る」という。最近日本に戻ったら、年金問題が沸騰していた。未払いの国会議員が次々と辞職するの大騒ぎになっていたらしい。何だかもう、大変な世界に戻ってきたような気がして、つい身がすくむ。



木陰で話し合うアフガンの老人たち (パシワール会ホームページから)

最近日本に戻ったら、年金問題が沸騰していた。未払いの国会議員が次々と辞職するの大騒ぎになっていたらしい。何だかもう、大変な世界に戻ってきたような気がして、つい身がすくむ。

私たちの水路の総工費が二百万程度で、十万人が飢餓を免れる。現地からすれば、この大千ばつの中、額の大ききにも目が飛び出るが、本当に「選挙」ができるのか怪しいし、年金制度でお年寄りが困るような世界が来るのがさらに不安である。そのため外国が軍隊をくりだすのは首をかしげる。

手近な所でとりまくる、六百人の作業員全員が武装した農民なので、いつでも一個中隊くらいは編成できる。

現地では「年金制度」などもちろんないが、長老を大切にしているので、「老人問題」が存在しない。年をとることに脅える必要がない。私は結構居心地が良いと思っているが、「たいそう危険な所で立派なお仕事を」と称賛されると、返答に困ってしまう。最近、アフガニスタンも「民主化」されたそうで、八十億をばら撒いて選挙人登録名簿を作成していると聞いた。

現在、東部アフガンの山地で水路作業の指揮を執っている、日本を思い出すとおかしくなる。道路を勝手に切る、発破作業はやり放題、碎石は